



Title	文学部「情報活用基礎」を担当して
Author(s)	白井, 詩沙香
Citation	サイバーメディア・フォーラム. 2019, 19, p. 33-34
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73409
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

文学部「情報活用基礎」を担当して

白井 詩沙香（大阪大学 サイバーメディアセンター）

1. はじめに

文学部の情報処理教育科目「情報活用基礎」は、1年前期に開講している2単位の必修科目である。毎年、約180名の新入生がサイバーメディアセンター豊中教育研究棟の3つの情報教育教室に分かれて授業を受けており、1クラスあたり教員が1名、TAが1~2名という体制で並行して授業を行なっている。

全学共通の情報教育科目である本授業の目的は、『情報の伝達・収集・整理・分析などの方法の基礎を習得し、情報を活用できるようになること』であり、コンピュータを用いた演習を通して、これらの技術を修得することが求められている。

本稿では、筆者が担当した2018年度の講義を中心に、文学部における「情報活用基礎」の講義内容と講義における情報教育システムの活用について紹介する。

2. 講義内容

本授業は90分・全15回の半期科目で、「大阪大学の情報環境（情報教育システム、OUMail、図書館システム等）」や「情報倫理」、「インターネット」、「情報セキュリティ」等を学ぶ全学共通の内容と学部毎に設定した授業内容から構成される。文学部では、全学共通の情報リテラシーに関する内容に加え、以下の内容を取り扱っている。

- ・情報発信（ホームページの作成）
- ・表計算ソフトウェアの利用
- ・ファイルシステムの仕組み
- ・コンピュータの仕組み
- ・プログラミング（PEN）

文学部の学生の多くは、在学中にソフトウェアを開発したり、情報システムを構築したりする機会はないが、情報通信技術や情報サービスに囲まれて生活しており、様々な場面でそれらを適切に活用することが求められている。そのような背景を踏まえ、本授業では情報科学の

原理・本質・価値・限界・可能性を知った上で、情報技術を活用する基盤的な素養を身につけることができるよう授業内容を選定している。特に、これまでコンピュータに触れる機会が少なく、情報機器の操作に苦手意識をもつ受講生が多い傾向にあることから、次の2点を授業のねらいとして進めている。

- ・基本的な情報通信技術や情報サービスの使い方は簡単であることを体験する
- ・高度な機能を覚えるのではなく、自分でマニュアルを調べて解決できる能力を修得する

情報通信技術の発展は早く、ソフトウェアのバージョンアップ等で、表面的な部分はすぐに変化してしまうが、情報科学の本質的な部分を理解できていれば、新しいシステムやソフトウェアに対して柔軟に対応することができる。本授業では、講義や演習を通じて、こうした情報科学に関する基盤的な素養を修得することを目指している。

3. 授業における情報教育システムの活用

講義を行なっている豊中教育研究棟の情報教育教室には、受講生用の情報教育端末と端末2台につき1台の教材提示用モニターが設置されている。授業では、教材提示用モニターに教員の端末画面を表示し、受講生はモニターを見ながら、演習を行っている。また、情報教育端末はVDI（仮想デスクトップ）を導入しており、BYOD（持ち込みPC）や自宅PCから情報教育端末の仮想デスクトップを利用することができる。2018年度は、授業で持ち込みPCを利用する学生はいなかつたが、自宅PCから情報教育システムの仮想デスクトップに接続し、授業課題に取り組む受講生は見られた。

授業資料や課題の提示には、授業支援システム CLE（Collaboration and learning Environment）を利用している。CLEからサイバーメディアセンターが提供している3つ

の情報倫理教材（「情報倫理デジタルビデオ[1]」、「INFOSS 情報倫理[2]」、「キーワードで学ぶ最新情報トピックス[3]」）が利用可能で、本授業でも授業外学習や課題として活用している。また、授業終了後に CLE 上で授業アンケートを行い、授業の改善に繋げている。

さらに、本授業では MS-Office 操作スキル習得のために、e ラーニングサービス「ナレロー[4]」を利用している。本サービスもサイバーメディアセンターが提供しているもので、VDI 環境であれば自由に利用することができる。本サービスは、システムに表示された問題文の指示に従って、MS-Office 上で操作を行うもので、ゲーム感覚で学習を進める仕組みになっている。MS-Office の操作スキルは、初等中等教育段階での利用経験の違いにより受講者間の習熟度合いの差が大きいことから、一部は対面授業で扱うが、基本操作の習得については、各自「ナレロー」等を利用して、学習するように指導している。対面での授業時間が限られていることから、自学自習が可能なものについては、こうした e ラーニング教材を使って授業時間外に学習してもらい、対面授業では TA によるサポートや教員による細かな指導が必要な学習内容に注力できるように工夫している。

4. 2018 年度の実施状況と学生の反応

2018 年度の受講者数は、再履修生も含めて 183 名で、例年通り 3 クラスに分かれて、同時並行で授業を行った。授業内容は講義前半に学生生活で必要な「大阪大学の情報環境」に関する内容や「ホームページ作成」といった受講生が興味を持って取り組める内容を扱い、まずは情報教育システムの利用に慣れてもらうようにした。講義後半は、コンピュータやインターネットの仕組みに関する講義やプログラミング演習を行い、情報科学の原理や限界、可能性を体験してもらう内容とした。

全授業終了後に行った授業アンケートの自由記述による感想の一部を表 1 に示す。コンピュータは利用しているが、その仕組みは理解していなかったので、面白かった、参考になったといった意見が多かった。ファイルシステムに関する演習やプログラミング演習など、一部学生には、授業内容が難しい部分もあったが、試行錯誤しながらも意欲的に演習に取り組む様子が伺えた。

表 1 自由記述による感想（一部抜粋）

授業全体を通して

- 確かに内容は難しかったけれど、パソコンがどういうもので、どう動いているのか、またプログラミングとはどういうものなのかざっくりではあるけれど、知れてよかったです。
- 難しかったけれど、すごく楽しい授業でした
- 授業は難しかったが面白かった。コンピュータの知識は今後ますます必要になると思うので、勉強していきたい。

5. おわりに

本稿では、筆者が担当した 2018 年度の講義を中心に、文学部における「情報活用基礎」の講義内容と情報教育システムを活用した授業の様子について紹介した。

2019 年度からは、新カリキュラムでの情報処理教育科目が開始する。学生を取り巻く情報環境も刻々と変化するなか、本講義を通じて、受講生が高度情報化社会に生きるために必要な基盤的な素養を修得できるよう、努めてまいりたい。

6. 謝辞

本講義は、共同で担当させていただきました松浦敏雄先生、外川直子先生、前任の間下以大先生、TA のみなさま、そして情報教育システムスタッフのみなさまのご協力・ご支援によって進めることができました。心から感謝申し上げます。

7. 参考文献

- [1] 日本データパシフィック株式会社、情報倫理デジタルビデオ小作品集、<https://www.datapacific.co.jp/u-assist/contents/mrl010.html>
- [2] 日本データパシフィック株式会社、INFOSS 情報倫理、<https://www.datapacific.co.jp/u-assist/contents/mrl008.html>
- [3] 株式会社ナレロー、ナレロー®、<http://narero.com>
- [4] 日経 BP 社、キーワードで学ぶ最新情報トピックス 2018 e-Learning、<https://www.nikkeibpm.co.jp/item/1044/1044/index.html>